

第54回神奈川建築コンクール 住宅部門 審査総評 審査委員 吉川 昭

本年度の建築コンクールには、過去最高となる89作品の応募があり、書類選考を通過した18作品について現地審査を行った。残念なことに本年度は最優秀賞となる作品はなかったが、優秀賞9作品、アピール賞2作品を選出した。優秀賞作品については設計者、建築主、施工者の一体となった建築への思いが感じられるすばらしい作品であったと思う。

また、書類審査から現地審査へと選考された作品のすばらしさを現地にて確認することができた。それらの作品の中には、設計意図が現地審査から明確に理解できる作品、住まうの原点を基点とした作品、立地条件、周囲の環境を取り入れた作品、建物自体が存在を主張している作品、空間構成の面白い作品、集って住まう懐かしき空間の作品、そして今後、既存建築物のリユース・リノベーションへの対応も必要とされることとなる考えを実行した作品もあった。

今回の作品の中には日本に居を構えた外国の方の住宅も数点あり、「日本」というイメージが作品に明確な形で取り入れているように感じられるものがあった。現在の住まい、住宅への捉え方への再考を感じたように思う。また、当然のことではあるが、建築は建物単体で存在する物でなく、周囲の環境を如何に考えるのかも重要な設計条件である。戦後荒廃した時代から60年、建築が日本経済へ貢献したことは紛れもない事実である。建物はその国の「文化」の一部であるということも事実である。

今後も多くの住宅作品が建築主、設計者、施工者の考えの下で建てられることになるが、住まうということから生じる「文化」を失うことなくよりすばらしい建築文化が築き上げられることを期待して住宅部門の審査総評としたい。